

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## コメント&リプライ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之, 覃, 溥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008863">https://doi.org/10.15021/00008863</a>

## コメント&リプライ

塚田 覃先生、どうもありがとうございました。ただいまのご発表は、広西壮族自治区でおこなわれております生態博物館の取り組みにつきまして、大変具体的で、また現地の最新の映像をも交えてお話いただきました。

いくつか質問をさせていただきます。ご発表を伺っておりまして、生態博物館の建設は大変大きな意義を持っていることがあらためてわかりました。たとえば農村地域には昔は博物館はなかったのですが、生態博物館の建設によって農民が博物館の文化を共有するということが初めて可能になったんだということですね。ご発表の中では、民族の文化の生態を保護するだけではなく研究もおこなうという点、そして広西民族博物館と各地の生態博物館の間に研究のネットワークを構築していく点、さらに副産物として観光資源としても活用していこうとする点、生態博物館に指定された地域の少数民族の人々の社会や文化の発展を促進したり物質的な生活条件を改善していく点、結果的にその民族やその地域の人々の文化に対するアイデンティティーを深めていくという点が指摘されておりました。

このことにつきましては、私も共感することのできる部分は大変多いです。ただ、私の観点からしますと、いくつかの問題点も抱えていると思います。例えば観客の問題があります。どのような形態の博物館でも、展示というものは見せる側と観客との対話、あるいは交流の場なんですね。観客不在の博物館や展示はありえないです。

では、どのような対話が可能なのかということを検討することが大変重要な問題だと思います。そもそも、まず必要なのは、観客に来てもらうということですね。交通の便や、宿泊や食事といった施設の整備が不可欠です。生態博物館がその民族の伝統文化を濃厚にとどめている、比較的交通便利なところにつくられているのは、伝統文化の保存の現状を考えたときには大変よく理解できるんですね。しかし、遠いところゆえに、観客が行くには不便な場合があります。

だいぶ前ですけれども、2000年でしたか、貴州の梭嘎というところに行ったことがあります。ここは長角苗という女性が牛の角のような形の板を髪につけて、その上から付け髪を巻くミャオ族の村があります。大変ユニークな文化、習俗、服飾を持っているのですが、その梭嘎は都市から非常に遠いんですね。食事や宿泊のための施設がその当時はありませんでした。今はおそらく改善されてるかもしれません。

梭嘎を訪ねたときに私が思ったのは、観客との対話ということです。確かに梭嘎には展示ルームがありました。そこで長角苗の人々の民族文化を、パネル写真、あるいは物で紹介しておりました。ほかに現地の女性が民族衣装を着て、歌って踊ってくれたんですね。

では、そのほかに何をを見せてくれるのか。日常の暮らしの中で観客に何をどこまでを見せてくれるのかという問題があります。例えば一般の住民のお宅の中にまで入って、じかに人々と交流することが可能なのか。私は普通話しかできず、当地の言葉はわかりませんのでよく通じなかったんですけども、たとえば北京や上海などの都市から来た人と言語の上でどういう交流ができるのかという問題があります。

それから当然住民の権利がありますね。四六時中家の中に入ってこられたら、やはり困りますね。そうした住民の権利にも配慮する必要がある。しかし、こうした観客との交流は大変重要なポイントであろうと考えています。

そのことも含めて、観客の意見、観客の希望が反映される仕組みがどのように考慮されているのか。例えば各地に特有の民族文化、物づくりの技術がありますね。観客が物作りなどの現地の人びとの文化を参加体験することができることも必要なと思うんですね。

それから観客に来てもらうためには、民博でも大変努力はしているつもりなんですけれども、広報活動をしなければなりません。宣伝をしないと、今はなかなか、いらっしやってくださらないんですね。

貴州の省都貴陽の街を歩いていて、生態博物館の看板はまったく目にしませんでした。そのかわりに、黄果樹という東洋一といわれる有名な滝があるんですが、そういった観光地の写真はたくさんありました。こうした広報手段の問題がありますね。

まず、質問の第1点は、観客への対応の体制について、広西ではどのように取り組みをなされているのか、紹介していただきたいと思います。

2点目でございますが、観光業との結びつきです。この点は、時間の関係上ご発表の中ではあまりおっしゃらなかったと思いますが、生態博物館の大きな副産物として、観光資源としてそれを活用していこう、そしてそのことによって地元の人も潤うという目的があるように私は理解しています。

ところが、私が訪れた貴州の梭嘎では、非常に多くの人々が出稼ぎに行っていて不在でした。そこでは観光業との結びつきはあまり進んでいないように見受けられました。出稼ぎに行くと若い人がいないということは、文化の保護の担い手をどのように再生産していくのか、文化をどのように若い世代に伝えていくのかという問題にとっても重要でありますし、観光業を博物館とどのように結びつけていくのかも、大変重要な問題であります。

貴州の貴陽の近くに鎮山というところがありまして、そこの生態博物館にも行ったことがあるのですが、そこは農民レストラン「農家楽」が林立しておりました。そこは大都市近郊の景勝地のようで、生態博物館なのか、普通の観光地なのか、大変区別がしにくいような状況にありました。観光業との結びつき、あるいは文化の伝承ということは、今すぐ結論は出しにくい、長期的に考えるべき問題でございますが、こういった問題点

を広西ではどのようにお考えになっていらっしゃるのでしょうか。これが第2点でございます。

3点目は、時間の関係上短く触れますが、生態博物館の取り組みとして、広西民族博物館をまずつくり、そこが中心となって、各地の生態博物館との間で民族研究のネットワークをつくる、連携するというご指摘がありました。これは大変興味深い計画だと思います。

では具体的にどうするのか。覃溥先生は文物事業管理局で、文化庁の系統ですね。しかし、研究者の中には大学の先生もいますね。それから中国では民族のことを扱う民族宗教事務局の系統の人もいます。そういう人々とどのように具体的に連携して、どう進めていくのか。例えば、今回の民博の特別展「深奥の中国」でも歌掛けとかあやつり人形劇とかを映像を用いて展示しておりますけれども、そうした分野は地元の研究者の協力が必要です。地元の研究者とどのように具体的に連携していくのかということ、先ほどは時間の関係で触れられなかったと思いますが、少し補足していただきたいと思います。

それと政府と専門家と住民の三者が、生態博物館の持続的な発展に対する役割を担っている。地元の人々が受け身じゃなくて、実質的に参加していくことは大変重要なことです。おそらく今日の議論でも、文化の保護をめぐる、政府や知識人、専門家、住民が、それぞれの立場でどのようにかかわっていくのが議論のかぎの1つになると思うんです。そのあたりも具体的にどのようなことをお考えなのか、ご紹介いただきたいと思います。

覃 時間の都合上全部には答えられませんが、簡単に答えたいと思います。

1つ目は、博物館の文化と現地の住民との関係です。私は対外開放された4つの博物館の開幕式に参加いたしました。そこで忘れられない光景を見ました。現地の住民が私たちの博物館に入りましたら、非常に驚いていました。彼らの表情、彼らの目を私は忘れることはできません。いろんな理由があると思うんですが、彼らはこういう博物館があることを全然知らなかったと思います。博物館が何なのかということもまったく知らなかったと思います。ですから、博物館の中に入って、非常に複雑な表情をしておりました。単純な表情もあるでしょう。瑶族の70歳の婦人が、彼女の写真を見たときに、その写真を触ろうとしました。これはいったい何なんだろうって。ですから、博物館と現地の住民との関係は、非常に密接なものがあると思います。

では、子どもはどうでしょう。博物館の中にいろんなものがあるわけですから、初めて見るものがたくさんあったと思います。1つ目の質問に対する答えは、ここまでになります。

2つ目は、政府と専門家と住民の三者の関係で、どのようにお互いに役割を果たすか

という問題ですが、率直に申し上げて、広西の生態博物館に特徴があるとするならば、貴州よりも少しいかなということですね。私たちは少し準備もできましたし。

中国の生態博物館は、80年代の終わりに導入されたものです。貴州の場合は、ノルウェーの基金の関係もあったでしょう。ですから、どのようにこの三者を結びつけるかということ、そして海外の博物館との関係、この結節点を探そうにも、少し時間が足りなかったと思います。私たちは6年間考えて、準備期間を経て、そしてつくってきたわけですね。中国は文化機構だけではだめなんです。貴州は文化面では非常に重要な役割を果たしたと思うのですが、政府の政策が、また現地の住民とのかかわりは、今はよくなったと思うんですが、最初は少しぎくしゃくしていたのではないかなと思います。

私たちはすでに2つの機構を持っています。1つは、塚田先生がおっしゃいましたように、私たちの政府は、文化庁とか文物事業部だけではなく、そのほかに改革発展委員会、国民経済に携わっているところですが、財政の部門、教育の部門、また中国の民族関係の委員会、6つ、7つの政府の機関が、このプロジェクトについていろいろな仕事をしているわけです。それぞれが自分たちの部門に則した方法で、いろいろな仕事をしているわけです。

旅游局（観光局）も、ここ5、6年、対外的なPRはたくさんおこなっています。広西の南丹、三江、靖西の生態博物館は、すべて観光とのリンクもうまくいっています。財政の面では、中国の政府が毎年一定の基金を生態博物館のために出しておりまして、そして文化部門が直接おこなうということですね。それぞれの業務が正常に運営できるように、政府も100%のバックアップをしています。

塚田先生がおっしゃる条件ですが、私たちが生態博物館を探す場合に、いくつかの経験をしています。交通が不便ということで、私たちも問題に直面しています。まず第一に、はっきりとした文化の特徴を持っているところを探さなければなりません。人文的な、自然的な環境に恵まれたところを選ばなければなりません。2つ目には、現地の住民、現地の政府が積極的であるということ。3つ目には、努力することによって交通の面が少しくなり、ほかとの距離が縮まるということ。この3つの条件を満たすところに、これから生態博物館をつくらうと、私たちは考えています。

また、生態博物館の周りに小さな店舗をつくりまして、そこで食事ができるとか、そこで何ができるとかという形も考えています。もともと南丹は交通の不便なところでした。しかし、今、政府が全面的にバックアップしておりますので、生態博物館ができることによって、水の問題、交通の問題が解決されました。60年間水道水がなかったところに水が引かれました。ですから、観光客はそこできれいなお水が飲めるようになりました。逆にこのような博物館ができることによって、その環境がよくなったわけですね。

三江県は皆さんもご存じだと思いますが、その飲料水も、以前に比べて条件がよくなりました。環境もよくなりました。私たちが観光客によりよい条件を提供したいと考

えています。

もう1つ、住民の参与という問題、そしてどのように観光客を導入してくるかという問題ですが、私たちは、現地の住民だけではなく、また専門家だけではなく、観光事業を発展させるという形で、PRをするという形でこの問題を解決したいと考えております。

広西の旅游局も、今、4つの生態博物館を開設しておりますが、そこを重要な観光地点として力を入れておりますので、確かに数も増えております。私たちがどのように観光客に働きかけるかということですが、2つあります。1つは、場所を提供して、そこでお互いに触れ合うということですね。もう1つ、村々に代表的な、文化的な手本となる家庭を見つけまして、そこと生態博物館との関係を密接にしていくということです。例えば観光客がじかに地元の少数民族の住宅に入っていったらいろんな経験をするというものもつくっております。

そのほかにたくさんお答えしなければならないことがあると思うんですが、とりあえずはここまでにします。



広島民族博物館の建物。2008年12月に竣工し、2009年4月に正式に對外開放された。主屋は銅鼓を型どっている。



広島民族博物館の展示、銅鼓の展示室。



広西民族博物館のジオラマ展示。広西の全ての民族のさまざまな情景を再現している。



同上





靖西県の旧州チワン族生態博物館の展示室。



東興市のキン族三島生態博物館の展示。